

本学こども学科学生の キャリア形成に関する要因分析

Surveying the career choices of students at child science department
of Kanazawa Seiryo University

北 川 節 子, 永 坂 正 夫
Setsuko Kitagawa, Masao Nagasaka

〈要旨〉

こども学科学生のキャリア形成の現状把握と要因分析を行うために、平成23年1月時点で就職が内定した4年次生13名に対して半構成的なヒアリングを実施した。

ヒアリングの結果、「進路決定に関わる要因」については「人との関わりによって教職希望は強化する」「授業では進路の見極めが迫られる」「教科外活動は教職希望を強化する」「学外で子どもと触れる経験は教職希望を強化する」「アルバイトは進路に影響する」が得られた。「学校への要望」については「現場体験の改善と強化」「授業改善」「就職支援」「教員」「学生」に関するものが、「後輩へのアドバイス」については「進路決定を早くする」「自分で考え自分で行動する」「初志を貫く」「現場を知る」「人との関わりを大切にする」があげられた。これらの結果から、当学科における教育活動を評価し、今後の学生のキャリア形成に関する提言を行なった。

〈キーワード〉

キャリア教育、こども学科、教員養成課程

1 はじめに

平成23年3月、中央教育審議会は、高等教育におけるキャリア教育の推進方策の1つとして「体験的な学習活動の効果的な活用」を学校におけるキャリア教育のあり方に対する答申の中で指摘した。つまり「高等教育におけるインターンシップや課題対応型学習の体験的な学習活動は、学生・生徒の状況に応じ、知識・技能を身につけさせるとともに学生・生徒の能動的な学習を促進し、学校から社会・職業への移行を見据えて、社会的・職業的自立の意識を確立させることが中心的な課題となる。ⁱ」ことが述べられている。

教員養成課程におけるキャリア教育に関しては以下のようない先行研究がある。

長岡らⁱⁱは教育実習前後に質問紙による調査を行った結果、進路選択に対する自己効力（SECD）が教育実習前に比較して教育実習後の方が有意に高くなったと報告している。

河崎らⁱⁱⁱは教員養成大学にボランティアを核としたキャリア教育プログラムを構築し実践した。その結果、ボランティア経験（インターンシップ）はキャリア教育に対する学生の意識を高め、ボランティアを核とした地域連携による

キャリア教育は、仕事や生き方に対する学生の意識を高める試みであったと報告している。

大学教育の中でのキャリア教育のねらいを実現させるためには「大学の正規的教育活動だけでなく、学生による様々の自発的活動、広く企業等の事業所や地域社会における活動や仕事、家庭生活や交友関係等を通して^{iv}」行われるものであるといえよう。

当学科は平成19年4月に「子育てスペシャリストの育成」をコンセプトに新設され、小学校教諭一種免許、幼稚園教諭一種免許を取得できる課程が設けられた。入学生は小学校教諭、幼稚園教諭を目指す学生が多いことから、キャリア形成に関しては初年次から高い意欲を持っていることが予想された。また4年次におこなわれる小学校、幼稚園教育実習に先立ち、2、3年次に開講されるフィールド基礎演習、こどもフィールド演習は、地域の人々やNPO団体等とともに活動をし、幼児・学童と交流する機会を多く持つことによってキャリアに対する意識を強めるものと期待された。またこの他にCDP^v、ボランティア活動の推進などキャリア形成を推進する条件がそろっていることが本学の特長の一つである。

そこで今回、初めての卒業生を送り出す前に、在学中に

学生の進路希望がどのように変化したのか、さらにそれに影響を与えた要因について分析し、その結果を踏まえて本学科の教育活動を評価・反省し、今後の在学生のキャリア形成に資する具体的な提案をおこなうことを目的に以下の調査を実施した。

2 研究目的

子ども学科学生のキャリア形成の現状を把握し、要因を分析する。

3 研究方法

3-1 対象

4年生のうち1月までに就職が内定した13名を聞き取り調査の対象者とした。13名の内定先の内訳は「小学校」4名、「幼稚園」4名、「一般企業」4名、「公務員」1名である。

3-2 時期

平成22年11月15日～平成23年1月19日

3-3 調査方法

半構成的聞き取り調査で実施した。聞き取り内容は表1に示した通りである。

表1 聞き取り調査の内容・順序

入学前の進路希望
入学ガイダンス、山中研修（入学時宿泊研修）での進路希望の変化
1年次の進路希望の変化
2年次の進路希望の変化
3年次の進路希望の変化
4年次の進路希望の変化
進路選択に関する意見・提案
・進路決定の方法、時期
・指導について大学への要求
・フィールド基礎演習、子どもフィールド演習の影響
・進路決定について後輩へのアドバイス

ヒアリング時間は1人30分程度とし、学生個々に研究室で行い、プライバシーに配慮した。ヒアリング内容は録音し全内容を記述するか、本人に確認を取りながらメモをとった。

3-4 調査手続き

- ① 対象者に「調査のお願い」に沿って方法について説明し協力を求めた。
- ② 協力を承諾した学生には「調査協力承諾書」にサインをしてもらった。
- ③ ヒアリング実施

- ④ 記述した内容から意味ある文を取り出した。
- ⑤ 2人の研究者で取り出した文を分類、整理した。

4 倫理的配慮

この調査によって学生に不利益が生じないように次のことに注意し、学生にも説明し同意を得たうえで実施した。

- ① プライバシーを守る。
- ② 学生に調査の中止や内容消去の希望があった場合は意向にそう。
- ③ 個人が特定されるような記述はしない。

5 結果

ヒアリングの結果を表2に示した。「進路決定に関わる要因」「学校への要望」「後輩へのアドバイス」の3つのテーマについて分析が可能と判断された。

5-1 進路決定に関わる要因

学生の進路に大きく影響するのは「人との関わり」である。まず学生は受験の際に出身校の先生から指導を受けて教諭免許を取得できる学校として本学科を選択している。入学してからは教員からのアドバイス、研究の手伝い、学会発表の機会などが、幼稚園教諭、小学校教諭への意欲を向上させるように働いている。大学教員以外では学外の先輩・知人から影響を受けている。具体的には、他大学の先輩の助言によって一般企業の就職を考えるようになった、知人から公務員を勧められたなどがあり、一般企業、公務員への意欲を向上させる方向に働いていることが分った。調査対象となった学生は第一期生であり、学内にはモデルとなりうる上級生がいないため、学外の先輩・知人からの影響を強く受けたことが考えられる。

「授業」では進路の見極めが迫られていることが分かった。特に3年次生になってからの教科教育法では、自分に教員の適性があるのか考える機会となっているようだ。また教職必修科目が不合格になったことにより、教員免許をあきらめ一般企業に方向を変更した学生もいる。

授業のうちフィールド基礎演習、子どもフィールド演習は小学校・幼稚園教諭への意欲向上の方向に働いている。2年次から学校、福祉施設、文化活動を通して幼児・児童と交流する機会があり、これらの活動はキャリアを考える上で非常に重要な経験だったということが分かる。

「教育実習」では小学校で教師として児童と接し、実習先の先生から指導をしてもらうことで、教諭への意欲が向上した学生と、現場の大変さを体験した結果、教諭をあきらめた学生がいる。4年次の教育実習後に進路を変更することは、その後の就職活動が難しくなるため、3年次までに十分考える機会をつくることが重要である。

表2 進路決定に関わる要因

大項目	中 項 目	教職の 効果	人数	時期
人との関わり によって教職 希望は強化す る。	大学教員の勧誘	+	1	入学前
	先生の手伝い	+	1	3 年
	学会発表	+	1	2 年
	先生からのアドバイス	+	2	3 年
	出身高校の先生の勧め	+	4	入学前
授業では進路 の見極めが迫 られる	学外の先輩、知人	-	2	3 年
	教科教育法授業	-	2	3 年
	教職必修科目不合格	-	1	3 年
	教育実習	+	2	4 年
		-	3	4 年
	フィールド基礎演習で の経験	+	4	2 年
教科外活動は 教職希望を強 化する。	子どもフィールド演習 での経験	+	1	3 年
		-	1	3 年
	保育士講座	+	2	3 年
	入学ガイダンス	+	2	1 年
学外で子ども と触れる経験 は教職希望を 強化する。	プレゼミ合宿	+	2	3 年
	部活	-	1	3 年
	オープンピアツアで の経験	+	2	2 年
アルバイトは 進路に影響す る。	小学校ボランティア	+	2	2 年
	幼稚園ボランティア	+	1	3 年
アルバイトは 進路に影響す る。	保育所アルバイト	+	2	3 年
	アルバイトに熱中	-	4	1 年

注 「+」: 教諭への意欲向上
「-」: 教諭への意欲低下

「教科外活動」は学生に様々な進路を考えさせる機会となっている。保育士講座は3年次後期から開始された。この講座の受講に際しては小学校教諭と幼稚園教諭のいずれを自己のキャリアとして選択するかという決断をしなければならない。また3年次の9月に持たれたプレ・ゼミナール合宿の就職説明会でも将来の進路について決断をしなければならない。また過度な部活動はボランティアや講座に参加する機会を奪うため、教諭への意欲を低下させるように働いていることが分かった。部活と小学校教員採用試験や保育士試験との両立を図ることは非常に難しい。このことを遅くとも3年生の早い段階で気づかせることが必要であろう。

授業、オープンピアツア、小学校・幼稚園でのボランティアなど「こどもと触れる体験」は教諭への意欲を向上させるように働く。

「アルバイト」のうち保育所等、将来の仕事に直結するものは教諭の意欲向上につながる。しかし、収入と自分の趣味を満足させる目的のアルバイトは低下の方向に働いて

いることが分かった。

5-2 学校への要望

学生の要望は大きく「現場体験の改善と強化」「就職支援」「授業改善」「教員」の4つに分けられた。その結果を表3に示した。

表3 学校への要望

大項目	中 項 目	人数
現場体験の 改善と強化	演習内容の特化	1
	小学校ボランティアの幅広い募集	1
	小学校・幼稚園ともの体験	1
	現場との連携	1
	現場体験の時期を早める	1
授業改善	教育実習の時期を早める	7
	幼児系科目の実践的内容強化	3
	教科教育法の工夫	2
	論文・レポートに関する授業	2
就職支援	地域への幼稚園教諭養成PR	1
	就職指導の改善	2
	就職推薦の公平化	2
	キャリア教育	3
教員	教員との相談	2
	小学校関連教員の増員	1
	プレゼミ合宿の適切な指導	1
	教員間の協力	1
学生	先輩・後輩が関わられる仕組み	1

こども学科ではフィールド基礎演習、こどもフィールド演習での指導に力を入れており、小学校・幼稚園でのボランティアも指導してきた。

2年次のフィールド基礎演習はスポーツ学科と合同、3年次こどもフィールド演習は学科独自で行なわれている。大学への要望として、演習内容の特化、現場との連携、時期等について意見が見られた。今後は個々の演習について評価をしながら、計画的な演習となるように学科全体で指導内容を検討しなければならないと考えられた。

「授業改善」については多くの具体的な意見があった。教育実習は幼児教育実習、小学校教育実習とも4年次前期に実施された。小学校教員採用試験を受験した学生は、受験前に教育実習の経験ができれば、自信をもって試験が受けられるので、教育実習を3年次生に、遅くとも4年次の春、採用試験前に実施してもらいたいとの意見が多くみられた。

幼児系の実践的内容の強化については、実践的な手遊び、ペープサートの作成、ピアノの強化などを希望していた。これについては、幼児系の演習科目の設定、教育内容の選択と指導について更なる検討が必要と考えられた。この他

に教科教育法の工夫、論文・レポートに関する授業についての意見が出されており、授業方法、内容について検討の必要があると思われた。

「就職支援」に関しては地域へ幼稚園教諭養成のPR不足を懸念する意見があった。また教職から一般企業に進路を変更した学生へのサポート不足が指摘されており、就職指導の改善を希望する意見があった。

「教員」に関しては、教員と相談できる環境づくり、小学校関連教員の増員があった。また、プレゼミ合宿での適切な指導、教員間の協力を求める意見があった。これらの意見は、学生と教員、さらに教員間のコミュニケーション、人間関係の大切さを改めて考えさせられるものである。まず学生の意見に耳を傾けて、必要な時は厳しく指導し、また親身になって支える必要があると改めて思われた。

5-3 後輩へのアドバイス

後輩へのアドバイスについては表4の通り「進路決定を早くする」「自分で考え行動する」「初志を貫く」「現場を知る」「人との関わりを大切にする」が分類された。

表4 後輩へのアドバイス

項 目	人数
進路決定を早くする	4
自分で考え行動する	4
初志を貫く	3
現場を知る	3
人との関わりを大切にする	2

「進路決定を早くする」とよいとアドバイスしている学生は小学校教諭、一般企業の学生である。教員採用試験も、一般企業への就職活動にしても大変な困難さが伴うが、自分の成功体験からのアドバイスのようである。

「自分で考え行動する」は幼稚園就職者に多く、まだ当校の幼稚園就職に関する支援の仕組みが十分整っていないためからくる意見のようである。

「初志を貫く」は小学校教諭になった学生、また安定した就業先は決まったが、やはり小学校教諭になりたかったと述べた学生からのアドバイスである。一般企業、公務員の内定後も、小学校教諭にこだわり、仕事しながらも教員採用試験を受験し続けたいという意見が聞かれた。小学校教諭になりたいという入学動機を大切に、それを実現するための努力をしてほしいとのアドバイスであった。

「現場を知る」はボランティア、フィールド演習など様々な機会を通して、小学校の先生の実際の授業の様子を観察する、幼稚園の現場を体験することが必要という意見である。

6 考察

進路決定に関わる要因の分析から、学生のキャリア形成に及ぼす教員の役割の重要性が考えられた。学生は入学後、大学教員からの影響を受けてキャリアを形成する機会が多い。教員は学生と向き合い、学生の要求をしっかり受け止め、様々な経験の場を提供するなどの配慮が求められる。また教員一人ひとりが本調査結果を理解し、何が学生の入学の動機、初志を貫くための条件、環境となるのかを理解し、学生個々の言動を観察して、適切なアドバイスを行うことが重要と考えられた。さらによりよい環境づくりのための学科全体の検討、取り組みが大切であり、教員全体の協力態勢についても再認識させられた。

また学生同士の関わり、特に上級生との関わりを大切にすることがあると考えられた。サークル、学友会等、学年を超えた活動をしている学生は上級生からの情報を入手することができるが、アルバイト・ボランティアなど個別活動が中心の学生は困難な状況にある。年に数回、内定を獲得した4年次生と1, 2, 3年次生、さらに卒業生と在校生の話し合い・情報交換の場を設定することが必要と考えられる。部活、アルバイトなど個別の活動が就職に影響することがある。これらについても上級生からの助言が効果的である場合が多いので、話し合い・情報交換の場を設けるとよいと考えられる。

現在2年フィールド基礎演習は、スポーツ学科と合同の演習を設定しているが、実際には他学科の演習を選択するケースは非常にまれである。年々学生は、自分の進路や就職を視野に入れた演習を選択する傾向が強くみられる。今後、上級生の内定状況から就職の厳しさを実感するようになると、この傾向が今後ますます強くなることが予想される。2年フィールド基礎演習の運営方法を見直す必要性があると思われる。

学校への要望では、現場体験を早め、演習科目で取り組む内容を特化してほしいとの意見が見られる。特に3年次こどもフィールド演習は小学校、幼稚園、地域へ行き、授業の観察、こどもたちとの交流、具体的な支援の経験などができるため、キャリア形成に重要な機会と学生は捉えている。そうであるならば、今後は学生の希望する体験が計画的・継続的に積み上げられ、こどもフィールド実習が小学校、幼稚園実習に向けた予備的な実習のような形で実施されてもよいのではないかと考える。学科内でさらに検討を重ね、キャリア形成に有利な演習の計画をすることを提案する。

さらに教員採用試験は教育実習前に行われるため、小学校教諭を希望している学生は演習が予備実習的な位置づけとなることを希望している。つまり、こどもフィールド演習が、教育の現場を体験し教師としての役割が経験できる

ような場となることを希望している。今後、フィールド数を増加させ、さらに演習の場や内容・方法を特化させる等の検討が必要となるだろう。

小学校教諭については4人の学生が教員採用試験に合格し、各地へと巣立っていった。学生は小学校教諭を希望して入学し、3年次後半から4年次にかけて、時間を惜しまず学習に励み所期の目的を達成することができた。今後は2、3年次の演習科目と教職関連科目との関連を図り、学生が小学校教育実習の予備の実習としての経験ができるように配慮すべきであろう。

幼稚園教諭となった学生は幼児系科目の実践的内容の強化を希望している。当学科での幼児教育に関する実践的科目は次のような状況であった。

当学科では幼児教材等についての関連科目として既に「こどもと文化」2単位が開講されているが、選択科目のため履修学生は少ない。幼児教材の制作の経験がない学生は、4年次の幼稚園での教育実習前に初めてパネルシアター等を作成・実演したという状況であった。音楽については、1年次「器楽」、2年次「声楽」が設定されている。選択科目のため1年次はほぼ全員受講するものの、2年次は受講生が少ない。さらに3年次には音楽系の科目が設定されていない。そのため、2年次、3年次に全くピアノ等に触れることがない学生も出てきた。そこで4年次の幼稚園での教育実習ではピアノが弾けない学生、就職試験で幼稚園のピアノの課題について十分応えられず不合格となるケースが出るという現状であった。

県内の保育・幼児教育系の短大・大学では幼稚園教諭の養成とともに保育士養成も行なわれており、そこでは実践的科目として「保育の表現技術」4単位が必修科目として組み込まれている。これに比べて、本学では音楽・幼児系の実践的科目が著しく不足している現状である。

これに関しては、平成23年度新カリキュラムから、「器楽」を1年次の必修科目とし、3年次には前期「実践器楽」、後期「応用器楽」を選択科目として組み入れ、学生が1年次から3年次まで継続してピアノ等音楽技術を学べるように設定された。幼児教材の技術については「課題演習（保育実技基礎）」後期には「課題演習（保育実技応用）」を選択科目として設定し、平成24年度から開講される予定である。この他に幼児教材を作成する環境を整えるために平成22年度から制作室の設置、材料等の準備を本格的に行った。このようにいくつかの改善を試みたので、今後はこの成果を評価していきたい。

学生は「地域へ幼稚園教諭養成のPR」を要望しているが、歴史の浅い当学科では一朝一夕に解決する問題ではない。まずはゼミ担当の教員が就職先の幼稚園に訪問し、就職した卒業生の評価、幼稚園が期待する教諭の資質、本学の教

育の特徴等について、意見交換を行うような試みが必要であろう。さらに幼稚園に就職した卒業生が、その園に定着し教育活動を実践して成果を上げることが必要であり、その為に卒業生への支援も必要と考える。具体的には、卒業生の資質向上のための学習機会の提供等が考えられる。そのことを通してフローアップの良い大学として認知度を上げていくことができるのではないだろうか。

また論文・レポートに関する授業を希望している。これについては平成23年度から基礎ゼミナールにおいて経済学部と共通のテキスト^{vi}を用い、後期の業界研究レポートに備えてレポートの書き方を学ぶことになっている。

一般企業への就職活動は現状通り、経済学部の就職支援に合わせて行う方法が適当である。学部独自の取り組みである演習活動は、自分の能力を向上させる有効な手段であり自己PRにも使える材料となる。特に3年次のこどもフィールド演習が自己PRの手段として使われることが多い。これのみならず様々な活動を大学生活の中で取り組ませることが重要である。

7 提言

学生のキャリア形成を進める観点から、次の点に関する改善を提言したい。

- ① 小学校教諭を希望する学生のために、3年次こどもフィールド演習を予備実習的な位置づけとする。2年次のフィールド基礎演習、各教科教育法と関連を持たせながら、計画的に運営する。
- ② 2年次フィールド基礎演習は現在のように学科を超えた募集をするのではなく、学科の特性に応じた内容に特化し、学科ごとに運営する。
- ③ 4年生就職内定者と1、2、3年生、就業している卒業生と在校生との懇談会を計画する。下級生、在校生にとって、的確な情報提供と助言が得られる場とする。
- ④ 教員1人ひとりが学生支援の意識を高め、全体の協力態勢を強化する。
- ⑤ 卒業生のフローアップ研修を計画する。

8 おわりに

本研究の調査対象は第1回生22名中、平成22年内、23年初めに内定が決定していた13名であった。後の9名のうち2人は小学校非常勤講師採用、1人は公立幼稚園助教諭採用、福祉施設就職1名、一般企業就職4名、単位不足で再学習1名であった。本来なら全員にヒアリングをすべきであったが、内定が決定していない状態では、冷静に客観的に過去を振り返ることができないと判断して、あえて行わなかった。これは今後の課題である。

今回ヒアリング調査を行い、学生に向き合ってきた

意見を聞く、学生の生の意見を聞く重要性を改めて認識させられた。今後は数年おきにヒアリングを継続して行い、キャリア形成の変化を見ていきたい。また、この結果を基にして質問紙調査も計画できるが、今後の検討課題としたい。

最後に、本調査にご協力いただきました卒業生の皆さまに感謝申し上げます。

注

- i 文部科学省.「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について 中央教育審議会答申」『文部科学時報 平成23年3月臨時増刊号』 p 71, 平成23年 3月.
- ii 長岡大, 松井賢二, 山田亮. 2001「大学生の進路選択に対する自己効力と進路(キャリア)成熟 ―教育実習前後の比較を通して―」『進路指導研究』第20巻第2号, p11-20.
- iii 河崎智恵, 岩本廣美, 仲川元康. 2011「教員養成大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践」奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』VOL3, p21-28.

- iv 社団法人国立大学協会 教育・学生委員会.「大学におけるキャリア教育のあり方 ―キャリア教育科目を中心に―」平成17年12月1日, p 3 (<http://www.janu.jp/active/txt6-2/ki0512.pdf>).
- v キャリア・ディベロップメント・プログラム. こども学科では小学校教員採用試験のためのコースが1年次から4年次前期まで設けられ, 教職教養, 一般教養, 専門試験について学習する。この学習は正課の単位に認められない。
- vi 学習技術研究会. 2011「知へのステップ 第3版」くろしお出版.